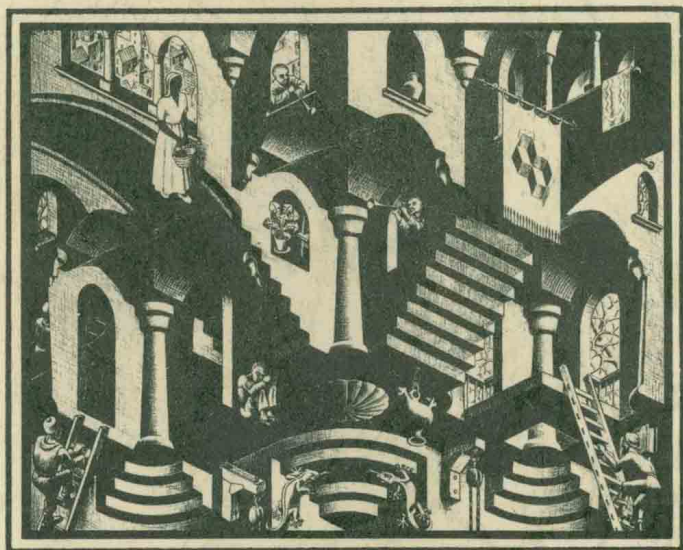


近代文学と都市

バートン・パイク著/松村昌家 訳



研究社出版

バートン・パイク

近代文学と都市

松村昌家訳 研究社出版

訳者紹介

松村昌家(まつむら まさいえ)

1929年生まれ。大阪外国語大学英語学科卒業、大阪市立大学大学院修士課程修了。現在、甲南大学文学部教授。

著書——『ディケンズとロンドン』(研究社)、『明治文学とヴィクトリア時代』(山口書店)、『水晶宮物語』(リブポート)。共編著——『文学における悪』(南雲堂)。訳書——H. J. ブラッカム『ヒューマニストの役割』(創元社)、U. ヴァイスシュタイン『比較文学と文学理論』(ミネルヴァ書房)、A. ウィルソン『ディケンズの世界』(英宝社)、J. P. ブラウン『19世紀イギリスの小説と社会事情』(英宝社)、その他。



KENKYUSHA

〈検印省略〉

近代文学と都市

定価二、〇〇〇円

一九八七年十月二十日 印刷

一九八七年十一月十日 発行

著者 バートン・パイク

訳者 松村昌家

発行者 石川雅信

整版所 平和堂印刷株式会社

印刷所 研究社印刷株式会社

発行人 研究社出版株式会社

東京都千代田区神田駿河台二ノ九
電話(〇三三)九一一一四一六(編集)
(〇三三)九一一一三〇一(販売)
振替東京七七八三七六一番
郵便番号 一〇〇一

目次

序文	1
第一章 イメージとしての都市	9
第二章 静的都市	45
第三章 流動する都市	107
第四章 個人とマス	151
第五章 無形都市かユートピアか	175
結び	205

訳者あとがき

参考文献

索引

巻末 213

巻末

序 文

西洋文化の中で、都市は常にいろいろな問題を提起してきた。この人為の産物は、わが国（アメリカ）の文明の中にもヨーロッパ精神の中にも深く根をおろしていて、都市を経験したり、観察したり、あるいはそれについて何かを書いたりすると、必ず強烈ないろいろな感情と鮮明な観念連想が生じてくるにきまっている。都市はたえず語り続けており、しかも多様な声をもつ。それはまた、文学が始まって以来、文学の世界のイメージとして大きな力を発揮してきた。作家たちがいったん都市に目を向けるとなると、彼らは必ず自らに対しても読者に対しても、いろいろな音色の混じった反応を喚び起こしながら、それを効果的に編成するのが常であった。

イメージとしての都市は、その広がりとは複雑さからいって、とうてい文学的表現の枠内だけで考えるわけにはいかない。外の世界に人為としての都市があり、そしてそれが作者と読者の心に喚び起こす屈折のスペクトルがあるのであるから、それはすでに二重の映像をもつものだと考えなければならぬ。読者が都市の描写を伴った書物を手にする前から、彼の頭の中には、すでに「都市」についての多くの連想が、詰め込まれているはずである。文学作品の世界では、このイメージは筋の通った一連の記号体系に組み入れられてしまい、そしてその意味は、おそらく極めて曖昧な形でしか経験的都市そ

のものとは関わりをもたなくなる。現実の都市が、文学的神話に素材を提供することはもちろんあり得る。しかしそれ自体としては神話になり得ない。神話的価値が都市に負わされるのである。芸術が生まれてくるのは、外の世界というより、むしろ芸術家の心の中である。芸術家は、彼が最初に思いついたアイデア、そして数々のコンヴェンションを通して読者の潜在的ないしは漠然とした心境を表現しているようなアイデアに適合するように、外の世界からもちこんだ諸要素を調整するのである。文学の世界で用いられた都市のイメージは、アルフレッド・ラングの次の議論を、まるで地で示しているようだ。「芸術における美的快感というのは、二つの連想体系、すなわち現実に関する諸連想と、芸術に関するそれらとの間をゆれ動く、われわれの心的態度に根ざしているのだ。」¹現実の都市と言語都市は多くの点でつながってはいるが、それは間接的で複雑であり、最初にそうと思われるほどには、相互に結びつかない。この問題に関する興味の大半は、結局、読者の側の漠然とした心境と、それに生きた表現を与える文学的記号との間に見出せるのである。

私はここで、以上のような現実とイメージとの関係の複雑さを尊重するためにも、文学と他の学問分野、特に社会学や心理学と公然と関連づけて論じる必要を感じた。全五章から成る本書の内容は、テーマとして連関性のある諸問題を論じたもので、必ずしも全体的に緊密な統一を目ざしたものではない。私のねらいは、文学批評としての一冊をまとめるというよりは、文学がいかに文化の理解に貢献できるかを示すことである。この点におのずから私の選んだ方法論も現われている。つまりいろいろな源泉から得た都市のイメージに関する個々の例を、並列するという方法をとってみたのである。これらの例を直接的な状況から切り離して、機能的に異なった文脈に移し変えることによって、もろもろ

のパターンがいちだんと鮮明な姿で現われてくるようになるであらうし、かつまた読者にとっては、議論を本書では扱われていない作品や時代に適用することが可能になるであらうからである。

現実の都市には、それぞれに独自の歴史がそなわっている。多くの都市が災禍や被爆、移転や再建、拡張や縮小などを経験しており、また世界におけるさまざまな現実的的目的の変遷の支配を受けてきているのである。しかし一方、イメージとしての都市に伴う連想と響きは、特に文学においては、西洋文化の発生以来、ほとんど変化がなかった、といってよい。歴史的都市の中には、ある特定の時代に限っては、文学上の神話になったものもあるが、ほとんど、あるいは一度も芸術家の想像力を引きつけないかった都市もたくさんある。神話化した都市というのは、一般に政治的文化的首都であるか、あるいは顕著な勢力の中心地であった。しかし神話というときに伴う連想は、古代叙事詩や旧約および新約の時代以来、さまざまな歴史の変遷や文化的力点の変化にもかかわらず、広い範囲にわたって、不変であつたように思われる。

私はこれらの不変の連想や姿勢が、世界共通のアーキタイプと相応するというつもりはない。むしろ私は、マックス・ウェバーとともに、われわれの都市観というのは、西洋文明固有の産物であり、したがって文化的に決定された心理——これにはもっと限定された意味でのアーキタイプの概念を含む——を反映すると考える。そのような精神的態度が、どのようにして世代から世代へ、また時代から時代へと移行するのかということは、現代の心理学にとって、一つの難問題である。が、本書が扱うのは、形象のイメージに伴う連想の問題であるから、それはどの苦勞はない。芸術のコンテクストの中で、この連想の連続性に見える現象についての最も理解しやすい説明を求めるとすれば、図式、あ

るいは固定形象ステレオタイプの改変に関するゴンブリッチの考え方をあげるのが順当であろう。彼の考えに従えば芸術家は、見えるものをただ模写するのではなく、目でとらえたものを、彼の心にすでにそなわっているモデルと関連づけ、それに合致させるのである²。このモデルの根底には、もちろん既存の図式がそなわっている。そしてそれは、言い換えれば、歴史上のある特定の時代における文化的コンヴェンションということになり、従って変化の生じ方が、一般的にいつて緩慢である、ということになる。

私の場合、都市問題の取り上げ方は、西洋文化のコンヴェンションと心理形態に基づくのであるから、当然西洋文化圏に現われた都市の研究に限定されることになる。極東の都市は、少なくとも歴史的には、異なった一組みのコンヴェンションに属する。それは、マックス・ウェバーが『都市』で論じているように、都市についての西洋的な考えには本質的な、都市市民や都市共同体の概念の存在しない、全く異質のものである³。これらの違いは、最近年とともに減ってきているとはいふものの、本格的な研究となると、どうしても当面のものとは別種の研究が必要である。

本書の全体を通じて主軸をなすのは、舗道の孤独感としての都市観である。この見事なホーソンの用語は、キリコやマグリットやエッシャーの都市芸術のように、撞着語法オクシモロニアに近い逆説を表わす。都市は大規模な社会組織の高度な発展形態である。そしてそれは、言葉の定義の如何にかかわらず、いやおうなく共同体としての性質をもつはずである。ところが十九世紀には、文学の世界は、共同体からの個人の孤立ないしは疎外をますます多く示すようになった。この強烈な逆説は、何とも奇妙であって、しかもそれを説明するとなると、思ったほど簡単にはいかない。舗道の孤独感としての都市は、西洋の歴史の全般を通して「都市」の観念に伴った、おそらく最も顕著な定数を近代的感觉で言い表

わしたものだといえよう。言い換えれば、トートエム的な対象に対する強い否定的な衝動も肯定的な衝動も、自らの問題を解決する能力をもち得ない、そのアンビヴァレンスが、舗道の孤独感によって代表されているのである⁴。

図式的にいえば、西洋文化における都市の歴史は大別して、五つの時代に分けることができる。すなわち古代都市、中世都市、ルネサンス都市、産業都市、そして次は適切な名前がないから、仮に言うとすれば後期産業都市である。もちろん各々の時代の都市は、構造も組織もそれぞれ異なる。西洋の古代都市が帝国の首都から都市国家までの分布をもち、教会や職人組合が、中世都市における生活の構造や特質を大幅に決定したのに対して、文化や商業の急速な発展が、ルネサンス時代のヨーロッパ都市の特徴となった。十九世紀になると、産業都市が台頭するようになる。その第一の特徴——利潤追求のための資本主義的投機——は、バルザックが「貨幣の酸化現象」と呼んだ、あの揮発性の化合物の爆発によって生じた。今日のいわゆる後期産業都市は、拡散し広く分散して、アリソン・リーがロサンゼルスについていったように、「無形都市」の様相を呈するようになっていく。今日の都市社会学者たちは、「メガロポリス」「通勤者団地」「集合都市」などといった言葉をよく使っているが、また明らかに名詞の「シティ」よりも形容詞の「アーバン」のほうを好んで用いる。

言語都市のもつアーキタイプの、歴史的含意が最も鮮明に現われてくるのが、本書の焦点をなす十九、二十世紀のヨーロッパ文学とアメリカ文学である。資本、産業化、人口、社会理論等の面での前例のない成長によってこの時代にもたらされた急速な狂おしい変革に伴って、おのずから歴史と社会の相関性についての自覚が広まっていった。大勢の人びとの心の内で、初めて都市と文化的・個人的

不安とははっきりと結びつき、個人と環境との間の均衡関係が崩れ始めたのに対する絶望感が高まった。十九世紀の文学には、以前から都市という強力なトポスに伴い続けていた、否定的な感情や連想を是認するような趨勢が現われ、都市生活の積極的な側面の多くが——ロバート・ニズベットがいうように、おそらく不公平なことではあるが——否定される傾向が生じた。

そこで第一章では、文学における初期の都市出現を概観し、西洋文明の始まりからいかに都市とアンビヴァレンスとが結びついていたかを例証することにする。第二章と第三章では、十八世紀から二十世紀にかけてのヨーロッパとアメリカ文学にあらわれた言語都市に付随した諸問題を集中的に論じる。これら二つの章では、この期間中に一般的に見られた都市の表現が、空間に固定されて本質的に静的であった対象の描写から、断片化し、時間の中をたえず移動し続ける主観的な万華鏡的な描写へと移行して行きたいきさつが示されるであろう。続けて第四章では、十九世紀後半と二十世紀初頭の文学に見られる疎外された個人の居場所としての都市と、画一状態にあるマスとの間の逆説的なコントラストを扱う。そして最終章では、空間現象としての都市が、今日のわれわれの社会における思考のコンヴェンションとして支配的になってきた時間と、強烈な衝突をきたすようになったこと、そしてさらにこの衝突によって、文学だけでなく社会学でも新たなアンビヴァレンスの表現が出てきていることを論じる。この章ではまた、二十世紀における都市論の重要なテーマとして脚光を浴びている、空間についての方位喪失の背景についても検討を加えたい。

私の見るところではすでに十分な研究がなされており、したがってここではほんの周辺のに触れるだけに留めておいた一つの課題として、都市対田園の問題がある。このトポスは、本来パストラルの

伝統に属する。この都市対田園の文脈の中で都市を見ていくと、今までの例からも分かるように、都市のイメージがパストラルの伝統とは別箇に、それ自体として人間の想像力に働きかけてきた、絶大な迫力から注意がそれてしまう恐れがある。これと合わせて、都会生活に対して田園を賛美する文学の大部分が、都会人によって、都会の読者向けに書かれてきたという事実も、注目に価する。

都市を主題にした社会学的文献も膨大な数にのぼり、またその方面での文学批評にも目ざましいものがある。そして両方とも質的に感銘深いものがたくさんある。各章の注に記されているように、私はいろいろな所から恩恵を蒙った。が、ここでは本書をなすのに大きな影響を受けた四つの研究書を特記しておきたい。ドナルド・ファンガーの『ドストエフスキーとロマンティック・リアリズム』、E・H・ゴンブリッチの『芸術と幻影』、ロバート・ニズベットの『芸術形態としての社会学』、そしてルイス・マムフォードの『歴史の中の都市』である。これらすべての書物は、特定の問題を一つの大きな枠組みの中にすえ、いくつかの異なった専門分野の間の対話に向かって先鞭をつけたものである点で、境界研究としての特色をもつ。

もし私が、歴史上最も精神的傷の深かった時期のニューヨーク市に居住し、かつ仕事をしていなかったとしたら果たして私の研究が、このような形で実を結ぶようになったかどうか疑わしい。ニューヨーク市を襲った危機のおかげで、この国の文化生活の中心であり、かつその象徴となっていた都市に対して、アメリカ市民——これも「都市」から派生した語なのだが——がいだいていた平素の意識下の態度が表面化し、数々のドラマを演じる結果となった。一人の研究者の研究課題が、このような方法で日の目を見るようになる機会に恵まれるのは、そう頻繁にあることではない。それを別とし

ても、この本は学問的には最悪の状況のもとで書かれた。しかしながら私は、クイーンズ・カレッジの友人や同僚たち、特にフレデリック・ブーエル、ルース・アン・クロウリー、ヴィンセント・クラパンザノ、リリアン・フェダー、A・ロバート・タワーズ二世等の諸氏から多くの助言と激励をいただいたことに対して、深甚の謝意を表したい。そしてクイーンズ・カレッジならびにニューヨーク市立大学大学院の学生諸君にも同様の感謝を送りたい。彼らの熱意も、私にとってまたとない心の支えとなったからである。

一九八〇年七月、ニューヨークにて、

バートン・パイク

注

- 1 E.H. Gombrich, *Art and Illusion: A Study in the Psychology of Pictorial Representation* (Princeton: Princeton University Press, Bollingen Series XXXV, 5, 2nd ed., 1961), p. 208 における要約による。

- 2 同右、特に八六―九〇ページを参照。

- 3 Max Weber, *The City*, tr. and ed. Don Martindale and Gertrud Neuwirth (New York: The Free Press, 1958), p. 83.

- 4 『トートテムとタブー』において、フロイトはフレイザー、スミス、ヴントなどの人類学的見解や学説を用いて、トートেমイズムの力を論じるとともに、クランと個人における欲望と禁忌の二律背反的な衝動との歴史的・心理的関係を論証している。

第一章 イメージとしての都市

群衆は波のようにあとに引いて、街路の末端近くに固まったが、一方の兵士たちはその全長の三分の一ほどの地点までしか進んでいなかった。両者の間からつぼの空間が生じた——その上に黄昏どきの影を落としながら聳えたつ巨大な建築物に挟まれた舗道の孤独感。——ホーソン「白髪の勇士」

文学の歴史を眺めてみると、いつの時代の文学にも都市が現われ続けていた。われわれはともすると、これを新しい時代の現象だと考えがちだが、実は初期の叙事詩や神話的発想の時代から連綿として続いてきているのである。遠く紀元前二千年頃のバビロニアの叙事詩『ギルガメシュ』や聖書、『イリアス』、『アイネーイス』等の世界を思い出すと、いずれの場合にも、その世界の活力と意味発現の場として、都市が存在する。これらの時代にも今日と同様に、小さな村落が周辺の地域と何らかの形での直接的なつながりをもって、ある範囲内で具体的な社会的役割を果たしたことはあった。しかし都市は、当初から何か特別の資格をそなえていた。大規模な社会生活の中心地としても、また宗教や軍事の中心地としても、都市は別箇のものであったのである。

古来都市といえば、人間のなし遂げたわざの中で何よりもまず最も印象深く、かつ目に映りやすいものである。それは人工の所産でありながら、もはや自然の世界における一つの実体となっていていってよい。全体からみて都市は、複数の要素を含む現象として成り立っている。世界には数多くの都市がある。そしてそれらの一つ一つが独自の歴史をそなえているのはあるが、全体が一樣にいくつかの類似の型態（ぶがう）を示しているとみてよからう。この面でもまず考えられるのが、過去と現在との相互浸透ということである。一方に街路や建物から成る可視の都市があり、過去のさまざまな時に固まったこれらのエネルギーの冷凍体の周囲に、現在の活発なエネルギーが渦巻いているのである。そして他方、その都市の生活者の心には、こういった過去と現在との連結によって生じる何本かの流れが潜在する。これらの流れは、都市の古い建築物のみならず、寺院、墓地、もろもろの儀式などをおして、その都市と死者の国との絆を含むと同時に、諸王、政庁、銀行等によって代表される世俗的権力の座としての機能をも含む。ノースロップ・フライは、反復を再創造とみるキルケゴールの考え方に従って、こういつている。「過去の文化は、人類にとっての記憶であるばかりでなく、われわれ自身に埋れた生命でもある。したがってその研究は、隠れた事実の発見につながる。すなわち、われわれの過去の生活ではなく、現在の生活の文化的形態が見えるような、一つの発見がなされるのである。¹」ジョゼフ・ライクワートもその特徴を指摘しているように、都市というものは「意志の通った要素と、統制の不完全な、場当たりの要素とが混り合った²」奇妙な人物なのである。それは「精神の状態」とよばれることさえあったのである。

都市は西洋文明の歴史を通じて、修辭的トポスとして用いられてきた。しかしそれとは異なった、

もう一つ別の側面もある。具体例としては、人のつくり出した世界と人間との関係にひそむ根深い不安をあげることができよう。意識的無意識的な緊張感が、最初から西洋文明の中の都市を特徴づけてきたのであるから、都市は当然その緊張感を結晶させていることになる。そういう結晶を考えてこそ初めて都市に対する人間の根強い執着が説明できるのであり、またトロイ、ソドムとゴモラ、そしてカルタゴ以来の、都市の破壊に関する催眠術的魅力についての説明も可能になってくるのである。

「人はアーキタイプに倣って建造する」とミルチア・エリアーデは『宇宙と歴史——永遠回帰の神話』の中に書いている。人間の居住する全地域のみならず、都市や寺院も天上の模範に倣ってつくられたものである。天地創造は神のみわざであった。そこで人間が物をつくるときは、この神のみわざをくり返すことになり、宗教的儀式をとおしてその関係を有形化するのである。聖なる都市、あるいは寺院は象徴的に宇宙の中心をなし、天と地と地獄の合流点となる。また先のライクワートによれば、都市建設のための浄めの儀式は、恒例の祭礼やさまざまな記念碑等の中でくり返された、ということである。都市建設は、ローマ帝国建設の時代に至っても依然として神話的儀式的事業として行われ、日常の实际的関心は、完全にそれに従属していた。そこでライクワートはいう。「都市は英雄によって建設されるものとしまっていた。そしてその英雄である建設者は、必ずその都市の中心部に埋葬されることになる。英雄は建設者の墓のみが、その都市の生きていた証しとなり得たのである。」この時代の都市の儀式と、プーシキンの『青銅の騎士』にうたわれた騎士像との間の距離は、さほど遠くはないのだ。

さらにライクワートに従っていえば、古代都市の建設とその出現の裏には、都市は当然のこととし

て自然の世界からの分離を意味し、神によって創造された自然の秩序に対する人間の意志の押しつけであるという考え方があった。だから都市建設の際の儀式が重要な意味をもつことになる。またその建設は、神の定めた秩序に対する干渉行為なのであるから、それには必然的に罪悪感が伴う。この罪悪感は、数多くの古代都市の建設者が、殺人者であったという面白い神話とも無関係ではないはずである。創世記にはカインが最初の都市建設者として登場する。ローマを創建したロムルスもまた兄弟殺しであったし、アテーナイの英雄テーセウスは、親殺しの建設者であった。都市は、公的名称とは別に、おそらく守護神の名をとって秘密の呼名がつけられていた。ローマの学者プリニウスは、ある行政官がローマの秘密の名を洩らしたために、処刑されたという逸話を伝えている。そこで今度は都市が破壊されるときには、建設の経路とは逆に、物理的破壊だけでなく、儀式によって根こそぎにされねばならなかった。都市という宇宙の聖なる中軸は、結局のところ、世俗への墜落を免れるわけにはいかなかったのである。

ジャック・エラルは、『都市の意味』という本の中で、古代ヘブライ語の「都市」という語に含まれていた複合要素について、実に興味深いことを指摘している。彼によれば、『都市』の意味で最も日常的に用いられていた語は、同時に「敵」の意味をも含んでいた。そして「都市」とつながりの深い語には、護りの天使、復讐、恐怖等の意味が付随していたということである。こういった矛盾し合う意味の結合は、遊牧民族にとってさほど驚くべきことではなかった。この民族は、彼らの歴史のかなりおそい時期まで、隣国（ないしは敵国）の人たちのように、都市に定着することを知らなかったのである。

こういう背景を考えると、歴史の記録が先ず都市から始まったということが明らかにしても、驚くに足りない。『古代都市』の著者フュステル・ド・クランジュによれば、「古代史は神聖な歴史であると同時に、特定地域の歴史であった。それは都市の建設とともに始まった。それ以前には何ものも興味の対象にならなかったからである」。

中世の人たちは、聖書はもちろんのこと、古代の都市計画や建設の伝統ともなじみが深かった。それゆえ、誇りと罪といった二律背反のイメージとしての都市概念は、ある種の歴史的メカニズムをもって、継承されることになったのである。といっても、このことだけで、人類の想像力に対する都市の根強い働きかけを説明することはできない。この根強さが、果たして本来歴史的に継承されたものなのか、それともフロイトやユングの唱える集団的無意識によるものか、また場合によっては（最終章に詳しく論じられているように）空間的環境に対する人間の本能的反応からくるものか、それともこれら全部にその他の要因が合わさって出てきたものか、いずれとも速断はできない。序文でもふれたように、芸術のレベルでは、ゴンブリッチの図式概念が、当面の都市に関する表現の連続性を説明するのに、役に立ちそうだ。しかし認識のレベルでの態度がどうして伝わるのかは、依然として問題である。権威者の中には、都市のアーキタイプの連続性を否定するものもある。ライクワートの議論では、現代の都市生活者は、その過去を意識しないことになっており、またジェイムズ・メラートは、古代都市といっても千差万別であるから、それについての一般論は通用しない、と主張する。だがこれらの反論は、あまりにも頑なである。現に古い教会や記念碑は、今日それらを見る人にとって「過去」を意味するのである。しかもメラートは、個々の事例を尊重するあまり、「都市」が一つの概念